

学会報告

第八回国際郭沫若学会学術シンポジウムは11月2日-4日にかけて岡山大学で開催されました。今回の学会は、国際郭沫若学会と日本郭沫若研究会及び岡山大学の共同開催となりました。中国、韓国、アメリカから22名の学者が出席しました。日本郭沫若研究会から10名の方が参加し、研究発表を行いました。開会式には岡山大学那須保友学長、森田絜前学長、遊佐徹副理事、張紅教授も参加され、那須学長から開会のご挨拶をいただきました。

会場は岡山大学医学部のある鹿田キャンパスでありました。110年前郭沫若は岡山の第六高等学校第三部医科に2年間留学しました。戦後、第六高等学校第三部医科が岡山大学医学部に編入された関係で、岡山大学医学部の前身と言われています。参会者一同、郭沫若と縁深いこの場所で学会を開催することに深い意味を感じていました。

学会は二つの会場に分かれ、研究発表が行われました。郭沫若について、文学、歴史研究、考古学、左翼運動、そして書に及び、幅広く研究成果を披露されました。日本側では郭偉さんの「戦後日本メディアの郭沫若評価」や、岩崎菜子さんの「郭沫若と中日文化研究所」、松宮貴之さんの「日本の郭沫若書法評価の空白」、堀川英嗣さんは「郭沫若の日本脱出を手助けした金祖同、錢瘦铁のその後」などの発表には郭沫若に関する新しい資料の披露があつて、会場での討論も盛り上りました。今回の学会に会員ではないが早稲田大学大学院の学生の参加と発表がありました。

4日に岡山市民公開講座が開かれ、160名以上の市民が参加されました。講座は「郭沫若と岡山」という表題で、森田前岡山大学学長は六高の歴史と郭沫若の留学についてお話された後、藤田梨那、名和悦子さん、遊佐徹さんが登壇して、それぞれ講演を行いました。公開講座には岡山県環境文化部担当の方、後楽園の責任者の方、岡山市日中友好協会の責任者の方も出席されました。

今回の学会は専門的な学術発表だけでなく、市民を巻き込んだ形で郭沫若と岡山の話題を広く扱ったところにその特徴があるのではないかでしょうか。盛会だったよという声が多く聞こえました。学会に参加してくださった皆さんに深く感謝します。一年半前から会の準備に尽力してくれた方々に感謝します。素晴らしい会場を提供してくれた岡山大学にも感謝します。会議の間、日本の会員たちと大学院生が自ら送迎や案内役を買って出てくれたおかげで会の運営がスムーズに進みました。皆様に深く感謝します。

三日間にわたる一連の活動が円満に終わり、達成感を感じると同時に、主催側として日本郭沫若研究会の会員がもっと多く参加してくれれば更に盛り上がるのではないかと考えます。海外から来てくれた学者や160以上の岡山市民の熱心さを前にして少し恥ずかしく感じました。日本の研究者たちは、この分野の研究をもっと推し進め、次の大会に皆さん総出で参加してくれることを切に期待する次第です。

藤田梨那